

初恋♥ビフォーアフター

Rin & Hazuki

結祈みのり

Minori Yuuki

eternity



エタニティ文庫

目次

初恋♥ビフォーアフター

5

書き下ろし番外編

あなたと共に

361

初恋♥ビフォーアフター

Prologue

——就職活動は、今日で最後！

表面上は落ち着きを保って、しかし内心ではそう強く意気込みながら、籠宮凜は深呼吸をした。

（大丈夫。今日こそ絶対、大丈夫）

本日何度目か分からない自己暗示をかけた凜は、鏡に映る自分を確認する。駅構内の化粧室の一角。鏡の中には、どこか不安そうな表情の女がいる。

その顔は、とても二十四歳とは思えない疲れ切ったものだった。薄ら塗ったファンデーションと色付きリップでかろうじて化粧はしているものの、よくよく見れば目の下には隠し切れない隈があるし、顔色もお世辞にも良いとは言えない。

面接に挑むのなら、本当はもう少しはつきり化粧をした方がいいのかもしれない。しかしこれが、今の凜にできる最大限のメイクだ。

今どき就活生でも着ないような黒のリクルートスーツは、細身な凜の体形に合っていない上に、薄い生地のアっばい代物だ。リサイクルショップでようやく見つけたそれは上下合わせて二千円。値段を考えれば致し方ない。

（口紅くらい、買えば良かったかなあ）

安いプチプラコスメにも可愛いものがたくさんあるのは、もちろん知っている。しかし、ここ一週間、一日一食の日が続いているのだ。口紅なんて買えるはずがなかった。

「あ、そのグロス新色？」

「そうそう。CMのモデルがカッコよくて気になってたの。発色もいいしおススメだよ」

隣に並んだ女性二人組のやりとりに、凜はちらりと視線を向ける。

「外国の男の人ってなんであんなに格好いいんだろう。骨格レベルで違う気がする」

凜より少し年下に見える彼女たちは、綺麗に染めた茶色の髪を、そろってふわりと巻いていた。

ぱっちり施されたメイクはそれぞれとても似合っている。ジェルネイルで彩られた指先が揃むそのグロスは、凜も街頭で流れるCMを見て気になっていたものだ。バッグもブランド物で、恐らく十万円はくだらない。二人の持ち物、服装全てが凜とは真逆だった。

「あの……何か？」

怪訝けげんそうに眉根を寄せる彼女たちの表情に、凜は無意識にそちらを凝視ぎょうししていたことに気づいた。

咄嗟とつさに一歩後ずさり、言葉を詰まらせる。女性たちは不機嫌な様子を隠ひそそうともせず、凜を上から下まで眺めた後、ふっと嗤わらった。

「行こ。……だっさ」

去り際に吐き捨てられた言葉は、自分でも思っていたことだ。それでもやはり、他人にはつきりと言われると辛いものがある。

ズキンと響いた胸の痛みにぎゅつとスカートの裾すそを握るけれど、すぐに手を離れた。皺しわの寄ったスカートで面接に向かう訳にはいかない。それに彼女たちを見つめてしまったのは、何も羨うらやましかつたからではないのだ。

「……懐かしかった、だけだもの」

ブランド物のバッグ、流行はやりの化粧品。そんなもの、数年前の凜は数え切れないほど持っていた。

(でも、同じものを買おうとしたら、どれくらい働けばいいんだろう)

考えとぞっとする。以前は値段など気にせず好きなだけ購入していたが、もし今お金が手に入ったら、間違ってもブランド物なんて買わないだろう。それより、お腹いっぱい好きな物を食べてみたい。

(美味しいお酒とお肉が食べられたら、他に何もいらなかも)

再度鏡を見る。人と比較した後だからだろうか。自分の姿は、先ほど以上に野暮やまったく映った。

「……っと、もう行かなくちゃ」

腕時計の時間を確認すると、十時半。もうすぐ最初の会社の面接の時間だ。

一社目は家族経営の小さな印刷会社の事務。そして二社目は、世界的にも名の知れた外資系企業の総務事務だ。凜の本命は前者の印刷会社。後者については試しに応募してみただけで、履歴書が通ったことに驚いたほどだ。面接を切り抜けられるとは到底思えず、こちらはあまり期待していない。

一社目の面接は十一時。面接会場は駅から徒歩十分ほどの場所なので、今から向かえばちょうどいい。

深呼吸をして沈みかけた気持ちを引き上げる。

確かに今の格好はダサイし、野暮やまりたい。しかし清潔感はあるはずだ。昔『日本人形みたい』と言われたこともある黒髪はきっちり一つに纏まとめたし、綺麗な姿勢には自信がある。

(連敗記録は、今日で終わり)

大丈夫。今日こそいける——そう自分に言い聞かせて化粧室を出た、その時だった。

「きゃっっ！」

「……っつと！」

何かにおつかつて倒れそうになったところを正面から抱き留められる。ふわり、と爽やかな香りがした。

「す、すみません！」

眼前の白シャツに顔を押し付ける形になった凜は、慌てて上を向き——息を呑んだ。

——人は、本物の『イケメン』を目の前にすると、言葉も出ないらしい。

今この瞬間、そう確信した。呆気にとられる凜をのぞき込む大きな瞳は、薄ら赤みがあったヘーゼル色をしている。髪は、柔らかそうな栗色。すっと通った鼻筋も形のいい唇も、全てが完璧な造作だ。間近で見ると見る血色の良い滑らかな肌には、染み一つない。

(外国の人……?)

そうとも見えるし、日本人にも見える。どちらにせよ、こんなに整った顔立ちの男性を見るのは初めてだ。その一方でなぜか見覚えがあるような気がした。

「——大丈夫？」

少し掠れて艶のある低い声が発したのは、日本語だった。何語で話しかけるべきかと迷っていた凜は、すぐに「ごめんなさい！」と頭を下げる。ここ数年で身に着けた九十度の完璧なお辞儀に、男性は驚いたように目を瞬かせた後、「顔を上げて」とそっと凜

の肩に触れた。

「俺の方こそごめんね。君、痛いところはない？」

男性は凜と視線が合うと、ほっとしたように微笑んだ。そういえば、先ほどの女子大生が言っていたグロスのCMに出ている外国人モデルに似ているかもしれない。

「大丈夫です。あなたにお怪我はありませんか？」

こうして対面すると、彼自身モデルであつても不思議ではないスタイルだということがわかる。身長も百八センチ以上あるだろうか。凜より頭一つ分は高い。

「もちろん。君は、羽のように軽かったからね」

白い歯を覗かせたその笑顔はあまりに様になつていて、凜は思わず見惚れた。

「そんな、ことは……」

ただのお世辞と分かつていても、異性からの甘い言葉を久しく聞いていなかった凜には、刺激が強すぎた。

「——ねえ、本当に大丈夫？」

「だ、大丈夫です」

「顔、赤いけど」

「だって、それはっ！」

どこか楽しそうに小首を傾げるその姿は、可愛いのに色っぽくて。

「近いから、ですっ……！」

わずかでも動けば唇が触れてしまいそうな距離に、凜は悲鳴にも似た声で言った。そんな凜とは対照的に、余裕たっぷりの男性は「ごめんね」と苦笑する。

「日本に帰って来たばかりで、まだ人との距離感が掴めてないみたいだ」

「日本の方じゃないんですか……？」

現在話している日本語に違和感はないが、やはり外国人だったのだろうか。

頬を赤らめたままきよとんと目を瞬かせる凜に、男性は「半分はそうだよ」と肩をすくめる。

「半分？」

「イギリス人とのハーフだから。一応、英国紳士」

「……自分で言うなんて、おかしな人ね」

少し落ち着くと、彼の顔立ちを眺める余裕もできる。凜はふわりと笑んで身体を離れた。

「とにかく、私の不注意でごめんなさい。お怪我がないようで良かったです」

その時、男性の表情がなぜか一瞬間まったように見えた。

気にはなったものの、そろそろ行かなければ。ぶつかっただのが話しやすい人であった。

この後の面接も上手くいけばいいなと思いつつ、凜は「それじゃあ」と背を向けた。

「——待って！」

不意に腕を引かれて振り返る。視線の先には、なぜか真剣な面持ちの男性がいた。

「あの、まだ何か？」

男性はその問いには答えず、代わりに凜の全身を——自他ともに『タサイ』と認める格好を眺めた。次いで凜の顔を正面から見据えて一言、言ったのだ。

「君、どうして『そんな』格好してるの？」

「……っ！」

何を、今更。

「あなたには関係ありません、失礼します！」

「待……！」

凜は渾身の力で腕を振り切ると、男性の制止も無視して走り出した。

前言撤回。——今日は、厄日だ。

I

それは、今から二年前、大学卒業を目前に控えた二月のこと。自由気ままな女子大生ライフも残すところあと少し、と浮かれていた凜の人生は、その日を境に一変した。

——父・籠宮伊佐緒いさおの経営する会社が、倒産したのだ。

その一報を受けた時、凜が真っ先に心配したこと。それは、
(イタリア卒業旅行は行けるのかしら?)
ということだった。

会社が無くなったのは確かに大変だ。生活スタイルも変わってしまうだろうし、残念だけれど旅行は厳しいかもしれない。しかし動揺する母や家人らとは対照的に、凜はおおむね楽観的だった。

四月からは父に紹介された旅行会社で働くことが内定している。しかもその社長とは、昔から家族ぐるみで懇意こんいにしており、凜も幼い頃から『おじさま』と慕っている人物だ。

多少不自由するかもしれないけど、普通に生活していくぶんには問題ないだろう。新

社会人としての不安はあるが、きっとなんとかなるはずだ。何か困ったことがあれば、おじさまを頼ればいい。

そう、思っていたのだけれど。

「申し訳ないが、今回の話はなかったことにしてほしい。理由は、分かるね?」

大好きなおじさまから遠回しに内定辞退を求められて初めて、凜は事態の深刻さを知った。

時を同じくして、友人だと思っていた子からも、パーティーの度に凜に言い寄ってきた男性たちからも、一切の連絡がなくなった。

家に戻らない父。娘を残して実家に帰ってしまった母。

けれど両親の不在はさして問題ではなかった。彼らは凜の欲しがる物を何でも買い与え、どんな我儘わがままも許していたけれど、そこに『家族の愛情』を感じたことは、ほとんどなかったのだから。

使用人たちは蜘蛛くもの子を散らすように屋敷を出ていき、広い屋敷には凜一人が残された。

その家からもたくさんの家財が運び出されていく。

来客の度に自慢していた父の絵画コレクションも、先々代から受け継がれてきたアンティークの家具も、電化製品から、それこそ凜の持っていたブランド品の数々に至るま

で、ありとあらゆるものが差し押さえられたのだ。当然、屋敷にそのまま住んでいられるはずもない。

凜に残されたのは、最低限の身の回りの品と古いアパートの一室。そして、慎ましく暮らせばなんとか数ヶ月は過ごせるだろう預金残高が記帳された通帳だけだ。通帳を凜に手渡したのも、アパートへの入居手続きも、全ては父ではなく、秘書が代理で行ってくれた。

学費を全額前納していた大学を卒業できたことだけは幸いだったが、卒業式には参加していない。式のために新しく仕立てた本振袖は既に凜のものではなかったし、可愛く着飾った級友たちを笑顔で祝福できるほど、当時の凜に余裕はなかったのだ。

その後の一人暮らしは、右も左もわからなかった。

朝の起床も髪形のセットもお手伝いさんに任せるのが当たり前だったし、幼稚舎から大学までの通学は運転手付きの車で送迎。

『してもらって当たり前』の生活。

日々のそれにお礼を言ったこともなければ、特にありがたと思ったこともない。

だから、初めは本当に大変だった。そもそも『慎ましい暮らし』がどういふものなのか、凜には分からない。預金残高はあつという間に底を尽きかけた。

このままでは来月の家賃も払えない。それどころか、光熱費だつてぎりぎりだ。

そうなって初めて、凜は自ら職探しを始めた。もちろん目指すは正社員。しかし、当然ながら『典型的』お嬢様の凜を雇ってくれるところはどこにもなかった。

収入がなければ生活が成り立たない。正社員になるまでの繋ぎでいい、とにかく働かなくては。

焦った凜が最初のアルバイトに選んだのは、ファミリーレストランの接客業。

しかしそこは、カルチャーショックの連続だった。

まず、あの値段で食事ができるのが信じられない。店内は騒がしく、休日ともなれば目が回るような忙しさだ。けれどそれ以前に、凜は『頭を下げる』ことができなかった。

(なんで、そんなにペコペコしなくちゃいけないの?)

(こんなに働いて、これだけしかお給料をもらえないの?)

お客様に注意されればむっとして、バイト仲間に注意されると機嫌を損ねて無視をする。

今までの凜はずっと人の輪の中心にいた。周りが凜に合わせるのが当たり前。

級友たちにも一目置かれ、異性だって皆凜の気を引きつけたのだ。バイトを解雇されても、凜は自分が悪いとは露ほども思わなかった。だが、その後も様々なバイトをしてはクビになり、凜はようやく自覚した。

(間違っているのは、私の方……?)

以来、凜は心を入れ替えて働こうとしたけれど、身に付いた仕事や考え方はそう簡単に変わらない。いくつかのバイトを掛け持ちしたり、短期契約社員として働いたりしたこともあるが、やはり正社員への道は厳しかった。何度も面接を受けては落ち、落ちては受けを繰り返す。時間は瞬く間に過ぎて、おんぼろアルバイトにも愛着も感じるようになった今、気づけば二年の月日が経っていた。



「籠宮凜さん、二十四歳。職歴は……アルバイトと派遣だけ？」

白髪交じりの面接官の失笑に、凜はすぐに悟った。

（この面接、ダメかもしれない）

駅でのいざござはあったものの、凜は気持ちを切り替えて面接に臨んだ。

就職活動を始めた当初は、自己紹介をするだけで精いっぱいだった。しかしある程度数をこなすと対応にも慣れ始め、今では最初のやりとりでなんとなく結果を予想できるまでになっている。そして残念ながら、その的中率は現在のところ百パーセントだ。

「二つ目のアルバイトを始めるまで空白の期間があるけど、大学を卒業してからは何をしていたの？」

「家事手伝いをしていました」

「それって、ようはニートだったってことだよな。その後はいくら働いていたとはいえ、学生時代にアルバイト経験もないみたいだし、……ちよっとそういうのは、ねえ」

「あのっ！ 確かに勤務経験は少ないですが、やる気は十分あります！ あと、御社の応募要項には職歴不問、とあったと思うのですが……」

「確かにそう求人を出したけど、それは言葉のあやとというか、まあ、常套句じょうとうくだよな」

時間の無駄。目の前の人がそう思っているのは、悲しいけれど手に取るように分かった。

「それに、これ何？ 趣味・特技欄がここまでぎっしり書かれてるのは初めて見たよ。華道に茶道、日舞にぶまひにピアノ？ バレエに書道って、これ本当？」

「はい！ 十年以上、習っていました」

「へえ。語学にも堪能なんだ。何語がいけるの？」

「英語と、あとはフランス語はある程度話せます」

「で、それが何かの役に立つの？ うちが一部上場の一流企業っていうならいいと思うよ？ 社長秘書とか、受付嬢とか、君の『ご趣味』を活かしてくれる部署もたくさんあるだろうね。でもうちがそうじゃないことくらい、分かるよね？ 欲しいのは実務のできる人なの。……それにねえ」

面接官は、凜を頭から足先まで嘗め回すように眺めた後、ふっと鼻で笑った。「仮にうちが大企業でも、『君みたいな』子は受付に座らせられないね」君みたいなダサイ子、どこの会社も取らないよ。そう、言外げんがいに示されたような気がした。

——恥ずかしい。しかし、面接官の言っていることも、正しいのだと思う。確かに一般事務の仕事に、綺麗な花の生け方なんて役に立たない。

今日も言われるのだろうなど覚悟はしていた。しかし改めて現実を突きつけられると、自分のこれまでの生き方を全て否定されたようで、喉の奥がひゅっと詰まるような感覚がした。

「あなたが幼稚舎から大学まで通っていたところ、有名なお嬢様学校だよ。で、経歴を見てもその通りだ。その上『籠宮』ときた。間違っていたら申し訳ないけど、あなた、籠宮社長の血縁者？」

面接で家族について聞くのはマナー違反。大学卒業後から就職活動を始めた凜でも、それくらいは知っている。だからこの質問に対する答えは簡単。につきり笑ってごまかせばいい。

「……はい。籠宮伊佐緒は、私の父です」

しかし、何度同じ質問をされても凜はこう答えてしまう。

「——ご苦勞様。結果はまた改めて連絡しますよ」
面接官と視線が合うことは、二度となかった。

(……また、ダメだった)

二社目の面接を終えた凜は、半分ぼんやりとした状態のまま、会社のエントランスを後にする。

一社目のやりとりを引きずって臨んだ二社目の面接では、集中力も切れて散々だった。面接内容に特段変わった質問はない。氏名と年齢、経歴。趣味や特技、あとは業務内容の確認。

唯一印象的だったのは、担当の男性が終始にこにこしていたことだろうか。

秘書室長の齊木さいぎと名乗ったその人は、凜の名前を聞くなり一瞬驚いたように見えた。

彼も『籠宮』の姓に反応したのだろうけれど、触れられなかったのはありがたい。

「——着信？」

鞆かばんから取り出したスマートフォンに目をやると、着信履歴が一件残っていた。最初の会社だと気づいた凜はすぐにかかけ直す。面接からまだわずかに数時間。こんなに早く結果が出るのは珍しい。

ドキドキしながら待っていると、コールが五回ほど鳴ってようやく応答があった。

電話口の女性のけだるそうな声に一瞬怯みそうになるけれど、明るい声を作って電話をもらった旨を告げる。繋がったのは、あの面接官だった。

『あー……籠宮さん?』

「はい! 先ほどはお電話に出られず申し訳ありませんでした!」

『いいえ。で、結果からお伝えします。せっかく来てもらって悪いけど、今回は御縁がなかったということで。それじゃ、これで失礼しますよ!』

凜の返事を待たずに電話はぶつりと切れた。予想していたはずだ。しかしいざこうなると、今度は別の意味でドキドキが止まらない。

六月下旬。梅雨時の今、湿度は高く、スーツの下にじんわりと汗をかいている。肌は不快な生ぬるさとの時期特有の暑さを感じているのに、身体の芯はひんやりと冷たい。(……大丈夫)

面接に落ちるのなんて慣れっこだ。今回はたまたま、父のことを言われたせいで、凹んだだけ。落ち込んでいる暇はない、すぐに次の会社を受けないと。それでもダメなら日雇いのアルバイトを見つけないければ、住む場所さえなくしてしまう。

——とにかく、何かを胃に入れていったん落ち着こう。

視線の先にはちょうど、アメリカの大手コーヒーチェーン店がある。

新作フェアが始まったばかりらしく、生クリームのたっぷり乗ったコーヒーフローズンの写真にそそられた。昔は生意気にも『あんなもの』と敬遠していたくせに、今では『贅沢なもの』として目に映る。財布に余裕はないが、今だけは自分のことを甘やかしてあげたかった。

入店して季節限定のそれを注文すると、少しだけ気分が浮上した。このまま散歩がてら帰るのもいいかもしれない。近くに公園があるし、そこでのんびり一休みしよう。そうすれば、この悶々とした気持ちも晴れるような気がした。

(気持ち、切り替えなきゃ)

凜がカップを片手に店を出ようとした、その時だった。手元のスマホに視線を落として向かってくる男性が視界に入る。避けようとしたが、下を向いた男性は、そのまま凜にぶつかってきた。

「いたっ……!」

正面から強い衝撃を感じた凜は、バランスを崩してその場に倒れ込んでしまう。

「——あつぶねえな! どこ見てんだ、このブス!」

顔を上げると、舌打ちをして凜を見下ろす中年男性と目が合った。ぶつかってきたのは、明らかに男性の方だ。それにも拘らず、彼は謝罪するどころかそう吐き捨てた。

尻餅をついたせいでお尻がじんじんと痛い。さらに上半身にびっしりと濡れた感触

があった。

混乱するまま自分の身体を見下ろせば、白いブラウスは零れたコーヒーと生クリームを浴びて酷い有様だ。右手に握ったままのカップから中身がぼたぼたと零れ、手首を伝っていく。

男性は立ち去る気配もなく、凜を罵倒し続ける。

何か言わなければと思うけれど、喉の奥が張り付いてしまったように声が出ない。

——ぶつかって来たのはあなたの方でしょう、謝りなさい！

そんな風にはつきりと言えたのはもう、過去の自分だ。

今の凜は、ただ小さくなって嵐が過ぎるのを待つことしかできなかった。

「ちっ、なんとか言ったら……」

「——今のは、明らかにあなたの不注意だろう」

誰もが見て見ぬフリをする中、その声は確かに凜の耳に届いた。

凜は、顔を上げる。そこには数時間前に別れたばかりの人物がいた。

「大丈夫？」

駅で会った時と同じように、彼は柔らかく笑む。予期せぬ再会に驚く凜に、彼はそつと水色のハンカチを差し出した。

「これを使って。少しでも待っててね」

反射的に受け取ると、彼は「大丈夫、すぐに終わるよ」と凜を背にかばって男と向かい合う。

「彼女に、謝罪を」

「……はあ？ んだてめえ、関係ないやつが口出すんじゃないよ！」

「聞こえなかったの？」

凜に背中を向けたまま、彼は無表情に言い放った。

「——謝れ、と言っている」

強い言葉に、対面した中年男性の肩が一瞬びくと震える。それ以上の反論を許さず、彼は淡々と続けた。

「俺は、あなたからぶつかっただのはつきりと見たよ。もちろん、他にも証人はいるだろう。この店の店員にも、客にもね」

「……ちっ、だから何だって——」

「耳だけじゃなく頭も悪いの？」

その瞬間、声が一変した。

「するべき謝罪もできないなら、今すぐ消えろ」

一切の抑揚を打ち消して彼は言った。顔を真っ赤にしていきりたつ中年と冷静な態度を崩さない男性。二人の違いは誰の目にも明らかだった。

「それとも警察を呼んで出るところに出ようか？ 希望するならいつまでも付き合っ
 げるよ」

口調こそ丁寧なもの、低く据わった声色こゝろいに、中年は最後に舌打ちをして、逃げるよ
 うに去っていったのだった。

「待たせてごめんね」

凧の方を振り返った彼の雰囲気は、一転して穏やかなものへと変わっていた。ズボン
 の膝が汚れるのも構わず地面に片膝をつくくと、彼は未だ座り込んだままの凧を心配そう
 に見つめる。

「あの、わたし」

「……立てる？」

言われて気づいた。足に力が入らない。耳の奥に残る怒鳴り声に、まだ足が震えてい
 たのだ。もしも彼が助けてくれなかったら、凧は今も怒鳴られていたかもしれない。

(……怖かった)

震えをなんとか抑えようとぐっと拳こぶしを握ったその時、凧の身体がふわりと浮いた。

「あ、やっぱり軽い」

彼は、流れるように自然な仕事で凧を抱き上げていた。横抱きのいわゆる『お姫様
 抱っこ』の状態に凧が呆気あきに取りられていると、彼は改めて「危ないから動かないでね」

と凧をぎゅっと抱き寄せる。密着したことで、零れたコーヒの汚れが彼のシャツにも
 移ってしまった。

「は、放してください！ 服、汚れますから！」

凧は慌てて彼の胸を押すが、見た目よりもずっと引き締まった身体はびくともしない。

「そんなの、どうでもいい……それよりも」

彼は左手を凧の後頭部にそっと添え、いつそう優しく抱え込んだ。

「君が泣きそうな顔をしている方が、ずっと気になる」

「——っ！」

一度会っただけの関係で、『そんな格好』なんて馬鹿にしてきたくせに、どうして優
 しい言葉をかけてくれるの。

面接の時からずっと気を張っていたからだろうか。不意に触れた優しさに、水のように
 固く閉ざされていた凧の心はいともたやすく溶かされてしまった。

「もう、いやっ……私だって頑張ってるのに、なんでっ……怖かった……！」

シャツが汚れるのも構わず抱き締められた途端、凧の気持ちは決壊した。

店の入り口であれだけの騒ぎを起こしたのだ。今も通行人の遠慮のない視線は四方か
 ら凧を突き刺していく。しかし彼は、それら全てから守るように、凧を強く優しく包み
 込んだのだった。



「——落ち着いた？」

「……はい」

近くの公園のベンチにそっと下ろされた凧は、俯うつむいたまま小さな声で答える。
 今日会ったばかりの男性に横抱きにされて、その上子供のように泣いてしまった。
 みつともないところばかり見られて、どんな顔をすればいいのか分からない。そんな
 凧に何を思ったのか、「はあ」と深いため息が聞こえてくる。

「君は、本当によく人になぶつかるね」

聞き捨てならない台詞せりふに反射的に顔を上げる。自分の不注意だった一回目はともかく、
 二回目は不可抗力だ。そう続けようとする凧の言葉を遮まぎったのは彼だった。

「やっと、顔を上げてくれた。……さっきの君は巻き込まれただけだ。見ていたから分
 かるよ」

男性は、凧を見てほっとしたように笑う。凧は反応に困りながらも、自分が汚してし
 まった男性のシャツを視界の端はしに認めてはっとした。

「汚してしまつて、本当にごめんなさい」

凧がまずするべきは謝罪だ。こうして正面から見ると、べつとりとついた汚れはハン
 カチで拭ぬった程度では取れそうにない。クリーニングでも落ちるか微妙なレベルのそれ
 に『弁償』の二文字が頭を過よぎるけれど、すぐに自分の経済状況も思い出す。

コーヒーを買ってしまった今、帰りの電車を抜かせば今の凧はほとんど無一文だ。

「あの、連絡先を教えて頂けますか？」

男性は目を瞬しげんかせると、形の良い唇の端はしを上げてにっこり笑った。

「驚いた、逆ナン？」

「違います！」

まだ人との距離感が掴つかめていないと言っていたけれど、この何とも言えないノリは彼
 自身のもののような気がする。

「シャツ、弁償させてください。ただ、今は手持ちが少なくて……後日改めてお詫わびし
 ますので、連絡先を教えて頂けますか？」

「気にしなくていいよ。俺よりも君の方が心配だ。シャツもスカートも大分汚れてい
 る。時間があるようなら、君の服を買いに行こう。もちろん、お金の心配はしなくてい
 いよ」

「そんな、助けて頂いただけでも十分感謝しているんです。それに、見ず知らずの方に
 これ以上ご迷惑をおかけするわけにはいきません」

「……見ず知らず、ね」

「あの、何か？」

「ううん、こつちの話。でも、俺がいいって言っているのに、君もなかなか頑固だね」
あまりの言い草に堪らず口を開きかけた凜に、男性はくすりと笑って続けた。

『長篠』

一拍置いた後に、それが彼の名前なのではと気づいた。

「……長篠さん？」

凜が名前を呼べば、長篠は「そう」と満足そうに頬を緩ませる。

「これで『見ず知らずの方』じゃなくなったね？」

言葉遊びをしているわけではない、と言いつ返す凜を、長篠はなぜか楽しそうに見つめる。

その熱心な視線に、凜はそっと目を逸らした。この抜群に整った顔立ちに対する耐性など持ち合わせていない。

「……私の顔に何かついていきますか？」

このタイミングでこの人からも『ブス』なんて言われたら、さすがに立ち直れない。しかし長篠の答えは予想の斜め上を行っていた。

「駅で会った時とも思ったけど、本当に可愛い顔だなあと思っつて」

一瞬、自分の耳を疑った。しかしその直後に感じたのは苛立ちだ。

「……バカにしたくせに」

「俺が、君を？」

『そんな格好』って言いましたよね」

覚えがないと言わんばかりの態度に、思い出させるよう凜は少しだけ強い口調で言った。

凜とて、好きでこんな格好をしている訳ではないのだ。誰もが見惚れるだろう長篠と、みすばらしい凜。そのあまりの違いに俯きかけたその時、「違うよ」と穏やかな声が凜の動きを止めさせた。

「そういう意味で言ったんじゃない。……でも、そっか。だから、あんなに怒つてたのか」

確かにそれもあるが、一番は凶星を指されて恥ずかしかったのが理由だ。

「さつきも言ったけれど、君は可愛いよ。だからこそ、それを隠すような格好をしているのを不思議に思っつて。薄化粧も清楚でいいけど、君はもつと自分の魅せ方を知つてははずだ」

よどみなく紡がれる誉め言葉にからかいの色は微塵もない。何より、凜のことを知っているかのような口ぶりに驚かすにはいられなかつた。凜と長篠は今日が初対面のは

ずだ。

「……以前、どこかでお会いしたことがありますか？」

駅で感じた妙な既視感^{きしかん}。見つめる凜に対して、長篠はやはり薄く微笑んだ。またまた。

「それ、やっぱりナンパにしか聞こえないけど。君のお誘いなら、喜んで受けるよ？」

「……いいです、もう」

若干煙^{けむ}に巻かれたような気がしないでもないが、凜は疑問を呑み込んだ。

（そうよね。こんなに目立つ人と会っていたら、覚えているはずなもの）

昔、会社関連のパーティーで会ったことがあるのではと思ったが、やはり気のせいだったようだ。

気を取り直し、改めて連絡先を聞こうとすると、にこやかにこちらを見つめる長篠と目が合った。

「——決めた」

「な、なにをですか……？」

今の凜に誠意はあるが、お金はない。いったい何を求められるのだろうと不安な凜とは対照的に、長篠の顔は妙に晴れやかだ。

「……っと、その前に。そのままじゃコーヒーの跡が目立つから、これを着て。俺ので悪いけど、ないよりはましだと思うから」

長篠は自分の着ていた薄手の紺^{こん}のカーディガンを脱ぐと、さっと凜の肩に羽織^はらせた。突然の行動に目を丸くする凜の手をそっと取って、長篠はベンチから立たせる。

「お詫^わびの方法。お金は必要ないよ。——君の身体一つあればね」

含みのある言葉に思わず固まったその隙に、長篠は凜の手を引いて歩き出す。

「ちよっ、長篠さん!？」

身体一つ、だなんて冗談じゃない。凜は慌てて両足に力を込め、抵抗^{こころ}を試みる。しかしその行動すら予想の範囲内とでもいうように、長篠は余裕の表情で振り返った。

「大丈夫、こんな昼間から変なことをする趣味はないよ」

それなら今すぐ放してください、と言い返す凜に対して、長篠は悪戯^{いたづら}っぽく微笑んだ。「大人しくしてくれないとまたお姫様抱っこするけど、それでもいい？」

今度こそ凜は言葉を失った。ある種、緊急事態だった先ほどとは違い、ここは真つ昼間ののどかな公園である。人の往来こそほとんどないものの、少し歩けば高級ブランド店が軒^{のき}を連ねる商業通りに出してしまうこの場所で、横抱きにされたら目立つどころではない。

凜の片手はきゅっと握られている。この様子では、長篠が自ら手放すつもりはなさそうだ。

答^{こた}えに窮^{きゆう}する凜をさらに追い込むように、長篠はゆっくりと一音ずつ言葉を続けた。

「お詫び」。してくるんだよね？」

じいっと凜に視線を向ける長篠の雰囲気は言葉とは裏腹に柔らかい。ヘーゼルの瞳に見つめられると、それだけで鼓動が速まる気がする。この人が、凜を傷つけることをするようには思えなかった。

「……私にできることでしたら」

「君にしかできないことだ。——さあ、行こう」

やはり、長篠は凜の手を握ったままだ。握り返すことこそしないものの、凜はひとま
ず抵抗することを止めた。

(不思議な人)

隣を歩く長篠はとても機嫌が良いように見えた。

公園を出てすぐに商業通りへと入った凜と長篠だが、すれ違う人は皆、一様に二人を
目に留めた。

やはり服の汚れが目立つのだろうか。凜は、借りたカーデイガンの前を片手できゅつ
と掴む。

しかし、すぐにそれは勘違いであると悟った。

人々が——主に若い女性が見ているのは凜ではなく、長篠だ。
すらりと長い四肢を持つ長篠は、凜より頭一つ分以上背が高い。

シヨームデルが本業であると言っても何ら違和感のない体形。羽織はついていたカーデイ
ガンを脱ぎ、サマーシャツ一枚となった長篠の上半身は、見事なまでに引き締まっ
ている。

肩同士が触れ合うほど近くにいるからこそ分かる。薄うすらと盛り上がった胸部は逞たくましく、
ゆつくりと歩く足運びは実に優雅だ。

抜群に整った顔立ちも、鍛きたえられた体軀たいくも、その全てが長篠という男を魅力的に見せ
ていた。

「この店だよ」

長篠の進行方向からもしやとは思っていた。しかしいざ店の前にやってくると、今ま
どとは別の意味で緊張した。高級店が建ち並ぶ通りの中でも、この店は格が違う。

欧州のとある王室の御用達ごようたしとしても知られるこのブランドは、数年前日本に初出店し
た際、各メディアで大きく報じられたものだ。

元々はスーツ専門店でありながら、近年ではカジュアルブランドも展開し、そのどち
らも成功させている。

お詫びのために連れてこられた先は、想像以上の高級店。今一度、凜の頭に口座残高
がよぎる。

(だめ。絶対、ムリ！)

すぐに帰って日雇いバイト先を探そう。しかしそれだって、シャツの弁償には一体何日働いたらいいのか——

「……何を考えているのか大体想像がつくけど、ここで君に何かを買わせようなんて思っていないからね？」

青ざめる凜の隣で長篠は笑いを噛み殺すと、躊躇ためらいなく凜の手を引いた。長篠が一歩足を踏み出すと、気づいた店員によって内側から扉が開かれる。

「長篠様、いらっしやいませ。ようこそお越しくださいました」

「さっそくで悪いけど、彼女に似合いそうなスーツ一式を何点か、合わせて小物も見せてくれるかな」

「かしこまりました。何かご希望の点はございますか？」

「フォーマルなものと、普段使い用の両方を。——ああ、そのダークグレーのスーツ、いいね。サイズもちょうどよさそうだ」

長篠がすぐ近くにあったレディーススーツに視線をやると、店員はすかさずそれを手に取った。

「インナーはホワイトのシフォンブラウスがあればそれを。まずはそのスーツを試着してみて、その間に俺が色々と見させてもらうよ」

「承知いたしました」

「長篠さん!？」

テンポよく進む会話の内容に驚き、凜は慌てて二人の間に割って入る。しかし長篠はそれを無言で流し、右腕を凜の腰に回すと有無を言わさず店の奥にある個室——恐らく試着室だろう——へ誘った。

「どうぞ、お嬢様？」

冗談とはいえ、その呼び方は洒落しゃれにならないからやめてほしい、とか。

なぜ私のサイズがわかるのか、とか。そもそもなぜ、自分の服が選ばれているのか、とか。

そんな当たり前の疑問を凜が聞く間もなく、「いってらっしやい」と試着室の扉が閉められたのだった。

——どうして、こんなことに。

問答無用で試着室に入れられた凜のもとには、次から次へと洋服が運ばれてきた。

仕事で使えそうなスーツやインナーはもちろん、私服で着られそうなブラウスやスカート、ワンピース。試着している間も、扉の外からは、長篠の「これもいいね」「ああ、それも」とやけに明るい声が聞こえてきた。さすがにパーティーで着るようなドレスが手渡された時には、「お願いですからもういいと伝えて下さい！」と女性店員に懇こ

願^{ねが}した。そして、今。

(これが、私?)

鏡の中には、身体のラインにぴったりと沿った品のあるダークグレーのスーツを着た一人の女性が映し出されていた。女子大生や面接官に鼻で嗤^{わら}われた野暮^{やぼ}ったい凜はどこにもいない。

一見お堅い印象を与えるジャケットからは、ホワイトのシフォンブラウスが覗^{のぞ}き、柔らかな雰囲気に見える。少し動くときわりと揺れるフレアスカートは、凜の細身ながらも女性らしいシルエットをよく引き立てていた。きつちり一つ縛りにしていた髪の毛は、「こちらの髪形もお似合いですよ」と女性店員がハーフアップにしてくれる。バレッタももちろん、店側が用意したものだ。

『高級ブランド』の洋服は過去に数えきれないほど着ていたし、むしろ普段着だった。もちろん、スーツを着たことは何度もある。

しかしそれはいざれも『働く』ことなど何も知らない、無知な子供の頃の話だ。

まだお世辞にも立派な社会人とは言えないものの、こうして『大人』の自分が改めて、きちんとしたスーツを着ている。それだけで、心なしか表情まで明るくなった気がした。

(……シンデレラみたい)

今の凜は、舞踏会に行けるようなドレスもガラスの靴も履^はいていないけれど。

そんな、小さな女の子みたいな想像をしまじうくらい、鏡の中の凜は鮮やかな変身を遂^とげていた。

「——着られた?」

不意に扉の外からかけられた声とノックの音に、びくん、と肩が震える。

「はい、大丈夫です!」

今の今まで自分の姿に見惚^とれていたことに気づき、凜は慌てて返事をした。すると、「開けるよ」という言葉と共に扉はゆつくりと開かれた。

最初に、綺麗な白シャツが視界に入る。長篠も着替えを済ませたようで良かったと安堵^どしたその時、瞳を大きく見開く彼と目が合った。食い入るような長篠の視線。彼は、それこそ頭のとっぺんからつま先まで、凜の全身を見渡していた。

「……長篠さん?」

彼が選んだダークグレーのスーツは我ながらとてもよく似合っていると思ったのだが、勘違いだったのだろうか。不安に思っ^{おも}って小首を傾^かげる凜に、長篠ははつと我に返ったように目を瞬^{しじ}かせ、「……ごめん」と小さく言^いった後、

「——綺麗すぎて、見惚^とれてた」

と、とろけるように微笑んだのだ。その瞬間、凜の頬に熱がともった。

(な、この人何を言っ……!)

顔が熱い。心臓がドクン、ドクン、と痛いくらいに鼓動を刻み始める。それは、今日出会った時から彼が見せたどの笑みとも違った。まるで恋人を見つめるような——凜のことが愛しくて堪^{たま}らないとでも言うような、チョコレートみたい甘いその笑顔。

『可愛い』

『綺麗』

お嬢様時代にうんざりするほど聞いたそれは、凜にとっては挨拶くらいの意味しか持たなかった。

それなのに今は違う。長篠の言葉一つに、こんなにも動揺してしまう。

「——うん、いいね。本当によく似合ってる」

本当に、やめてほしい。これ以上言われたらきつと、凜の心臓が持たない。

「そのスーツだけでなく、他の服や小物もぜひ使ってくると嬉しい。どれもきつと、君に似合うはずだよ」

これには別の意味でぎょっとした。

「そんな、頂けません！」

「どうして？」

それはこちらのセリフだと言いたいのをぐっと堪^こえ、凜は「頂く理由がないからで

す」とはっきりと告げた。凜が弁償のために長篠のものを購入するならいざしらず、自分がこんなにも高額なものを「はい、ありがとうございます」と受け取れるはずがない。しかし、長篠は引かなかった。

「受け取ってもらわないと困るな。だってもう、購入済みだから」

凜は、長篠の後ろに立つ店員をばっと見る。店員は、「後ほどお届けいたしますので、ご住所をお教え願えますか？」と実々にこやかな笑顔を凜に返した。

「今日彼女が着ていた物も一緒に送ってね」

「かしこまりました」

店員は綺麗な一礼をすると試着室を出ていった。扉は開いたままといえ、個室に二人きり。その状況にわずかに緊張しながらも、凜は再度長篠に説明を求める。

服を汚された、いわば被害者が汚した張本人に代わりの服をプレゼントするなんて話、聞いたことがない。

「頂く理由がない」か。理由ならあるよ。これは、俺のせめてものお詫^わびの気持ち。

朝、君におつかった時、『そんな服』なんて失礼なことを言ってしまったからね。だからこれは、その謝罪の意味も含んでる」

「私からあなたへのお詫^わびは？」

「君が俺の選んだ服を着る。俺はそれを見て目の保養ができる。それで十分だよ」

こうも感覚が違うと、もはや何も言い返せない。しかし、与えられるものを「ありがとう、頂くわ」なんてあっさり受け取れたのは、過去のことである。

タダより高いものはない、と昔の人はよく言ったものだ。

長篠と過ごしたわずかな時間で凧が彼について得られた情報は、ほんのわずか。本人の言葉を信じるなら、最近日本に帰国したばかりのハーフのイケメン。そしてお金持ち。

それだけだ。

「……やっぱり、受け取れません」

「困ったな。それだと、せっかくの素敵な洋服が無駄になってしまふ。残念ながら、俺に女装の趣味はないしね」

「なら、これが似合う素敵な女性に贈って差し上げて下さい」

「俺は今、そうしたばかりだよ」

「ですからっ！」

「素敵な靴は、持ち主を幸せな場所に誘^{いざな}ってくれる」

長篠は凧の言葉を遮ると、穏やかな声のトーンで話し始めた。

「俺の好きな言葉の一つだ。有名だから、君も一度は聞いたことがあるんじゃないかな？」

確か欧州のことわざの一つだった気がする。戸惑いながらもうなずくと、長篠はそつと微笑んだ。

「それは、服にも共通すると思うんだ。もちろん、一番大切なのは服を着るその人自身でも、その人に似合う服は持ち主に自信を与えてくれる。あるいは、新しい魅力に気づかせてくれる。それって幸せへの一歩だと俺は思うけど、君はどう？」

確かに素敵な言葉で考え方だ。しかし長篠が言わんとしていることが、凧には分からない。

「さつき、俺に『受け取れない』ってはっきり言った時。君は背筋を伸ばしてまっすぐ俺を見ていた。とても凧としていて、綺麗だったよ。零^{こぼ}れたコーヒ^ーを片手^{うづむ}に俯^{うつむ}いていた時の君とは、大違いだ」

長篠はゆっくりと右手を上げる。大きな手のひらがそつと凧の頬に触れた。凧は、なぜか動くことができなかった。不思議な色合いの瞳に、囚^{とら}われる。

「小さく縮こまっている君も可愛いけど、自信たっぷりに言い返す強い君の方が、俺は好きだな」

「長篠さ——」

熱を持った親指が唇をなぞり、凧の顔に影がかかった、その時だった。

まるで触れ合いを引き止めるかのように、大きな着信音が試着室に響く。

凜は、はっとしてすぐに一歩後ずさる。長篠はほんの一瞬、着信音に苛いらだつたように眉根を寄せると、「ごめんね」と短く断つて、ズボンのポケットからスマホを取り出した。

「はい。……ああ、ごめん。まだちょっと——」

電話をする横顔に、凜ははあ、と深い息をついた。

——まだ、胸がドキドキしている。

(……キス、されるかと思った)

それほどまでに長篠の距離は、近かった。キスなんてまさか、と思う自分と、もしかして、と思う自分と。いったい今日だけで長篠にどれだけ驚かされたのか、もはや数えきれない。頬に残る熱を何とか引かせようと呼吸を整える凜の前で、長篠はどこか焦つたように会話を続けていた。

「分かった、だから悪かったって。ああ、すぐに戻るから。悪かった、じゃあな」

電話を終えた長篠は肩をすくめて苦笑した。

「——タイムリミットみたいだ。もう戻らないと。駅まで送ろうと思ったのに、ごめん」

ほんの一瞬、残念だと思った自分に内心驚きながらも、凜は「分かりました」と頷うなづいた。

凜の方に彼を引き止めなければならない理由はない。しかしやはり、購入済みという洋服の始末についてはもう一度物申さなければ。そうして口を開きかけた凜を止めたのは、同じく長篠だった。

「ストップ」

柔らかな人差し指が強制的に凜の唇を封じる。

「お詫わびは済んだし、洋服は君の物。どうしても納得できないなら、次に会った時に俺のことを名前で呼んで。それで今回の話はチャラだ」

聞いたのは苗字だけで名前なんて知らない！ 視線で抗議する凜を長篠はふっと目を細めて見下ろすと、そのまま空いた左手で凜の右手をすくう。

——その後の動きは、まるで映画のワンシーンを見ているようだった。

ちゅつと、柔らかな感触が手の甲に落とされた。物語の騎士が姫君に忠誠を誓うかのごとき、その仕事。目を見開いて固まる凜を長篠は上目遣いで見つめた。

「またね、凜」

甘い囁ささやきと柔らかな余韻よゐんだけを残して、彼は去っていった。

「……名前」

凜は長篠に一度も名前を名乗っていない。しかしその事実気が付いた時には既すでに遅い。凜は仕方なく、新しいスーツを着て自宅へと帰宅したのだった。

その夜。畳に敷いた煎餅布団に横になった凜は、今日一日で起きたことを思い出し、身もだえしてころころ転がっては青ざめていた。何度かそれを繰り返すとさすがに虚しくなってきた、同時に一気に眠気が訪れる。本当に、色々なことがあった一日だった。面接に落ちて、歩きスマホの男性に絡まれて。そうかと思えば信じられないほどたくさん洋服を買って与えられ、キスをされた。

なぜ、彼は凜を知っているのか。『またね』とはどういう意味なのか。

分らないことはかなりで悩みは尽きない。しかし、身体も心も大分疲れていたらしい。翌日、服と小物の配達を告げるチャイムが鳴るまで、凜は熟睡したのだった。

——凜の採用を告げる電話が鳴ったのは、それから数日後のことである。

II

『LNグループ』

イギリスに本社を置く老舗化粧品メーカーは、世界的にも名の知れた外資系企業である。

女性なら誰しも一度は耳にしたことがあるだろう化粧品の有名ブランドを数多く持っており、長篠に似たモデルがイメージキャラクターを務めるクロスも、この会社が発表したものだ。

その日本支社の面接を凜が受けたのは、今から一ヶ月前——長篠と出会い、別れたあの日である。

あの時はまさか、LNグループに採用されるとは思ってもしなかった。

英語が堪能であること、お茶やお花など日本の伝統芸能に明るいうことが採用理由の一つだったと、後に面接官の斉木は教えてくれた。

履歴書が通過しただけでも驚きだったのに、まさかの大企業に、まさかの就職。そして右も左も分からない凜が配属されたのは、総務部秘書課だった。

秘書課の業務内容は多岐に亘る。社長を始めとした役員のスケジュールやアポイントメントの管理、書類の翻訳……と、サポート全般と言っている。こまごましたことを上げればきりがないのだが、新入社員の凜の主な仕事は、先輩社員のサポートだ。

書類の翻訳を手伝うこともあれば、お茶を入れたり、電話を取ったりすることもある。一般企業と少し違うのは、社内を飛び交う言葉に日本語と同じくらい英語が多いことだろうか。

正直、慣れないことばかりで初めのうちは大変だったけれど、それ以上に『忙しい』

毎日——誰かに必要とされる毎日は、楽しくて堪らなかつた。そして、七月最終日。

「籠宮さん」

時刻は十七時半。終業時刻の訪れと共に、向かい側のデスクから声をかけられた凜は、緩みかけていた表情を慌てて引き締めた。

「はい！」

「お疲れ様、もう上がる時間よ」

入社して一ヶ月。凜にはまだ残業するほどの仕事はなく、定時出勤・定時退社を厳命されている。

無駄な残業は徹底排除が大前提。周囲を見れば、凜以外の社員もちらほらと帰り支度を始めている。しかし、対面の先輩社員——奥平裕子は、まだ仕事が残っているようで、「疲れたあ」と肩を回しながら凜を見ていた。

「そういえば、今週金曜日の夕方は空いてる？」

「はい、空いています。会議ですか？」

「ううん、飲み会のお誘いよ。場所は、あなたが前に行きたいと言っていたイタリアン。どう？」

奥平とは既に何度か食事を共にしていたが、話題が豊富な彼女と過ごす時間はとても楽しかった。

「ぜひ、ご一緒させてください！」

「良かった。あ、今度こそあなたには出させないからね。いい加減、先輩の顔を立てることを覚えなきゃ」

奥平はふわりと笑った。その柔らかな表情に凜は、同性ながら一瞬見惚れる。

今年三十四歳を迎えるという奥平だが、自分より十歳も年上だとはとても思えない。スツキリとした黒髪ショートカットに真っ赤なルージュ、ホワイトのパンツスーツ。すっかり『憧れの先輩』となった彼女は、新入社員である凜の指導係だ。

「おい籠宮さん！ ぼうつとしちゃって、大丈夫？ 疲れちゃったかな？」

「い、いえなんでもありません、失礼しました！」

からかうように目の前で手をひらひらと揺らされて、凜は慌てて立ち上がる。まさかあなたに見惚れていました、なんて答えるわけにはいかない。凜の直立不動の姿勢に、奥平は一瞬目を丸くした後、けらけらと笑い始めた。

「あーもう、籠宮さんやっぱりいいわあ。ほんつと可愛い、大好き」

凜の方こそ、とびっきりの美人なのにそうやって大口を開けて笑う奥平が大好きだ。

初めての女性の先輩がこんな風に素敵な人で本当に良かった、と思ったその時、奥平の隣に一人の男性が並んだ。

「なんか楽しそうな会話してるな、俺も入れて」

「斉木室長」

斉木徹。きちんとプレスされた白シャツに青のネクタイがキマって見えるその人は、

凜と奥平の直属の上司である。

「あら、室長。おかえりなさい。出張お疲れ様でした」

「ありがたい、奥平。あー今回は疲れた」

「室長が弱音を吐くなんて珍しい。その様子だと、新社長と相当やりあったみたいですね？」

「……まあ、な」

先日、LNグループはトップ——イギリス本社に在籍する会長の交代に伴い、大規模な人事異動を発表した。九月一日付で日本本社にも国内外から新しい人員が配属となるらしい。

それもあったて斉木を始めとした社員たちは、忙しい日々が続いていた。

「久しぶりに会ったけどあいつ、変わってなかったよ。綺麗な顔して厳しいことばんばん言ってくる」

「早く会いたいわ。私もあの子に会うのは久しぶりなもの」

これに凜は驚いた。斉木は比較的砕けた態度を取っているけれど、社長を「あいつ」呼ばわりするような人ではないと思っていたからだ。それに、奥平まで「あの子」呼ば

わりするなんて。

「あら、ごめんなさい。斉木室長、ちゃんと説明してあげないと。籠宮さんが驚いてますよ」

「ああ、そうだよな。九月から来る新社長、実は俺と奥平の昔からの知り合いなんだ。籠宮さんも会ったら驚くよ、きつと。中身はともかく、見た目は相当なイケメンだからな」

俺と同じくらいには、とおどける斉木に凜はくすりと笑った。

「でも、帰ってきて美人の部下同士が笑っているのを見て癒されたよ。俺、この部署で良かった」

「あら、誉めても何も出ませんよ？」

「本心だからね」

「はいはい、ありがとうございます」

奥平と斉木は同期ということもあってかなり気安い関係らしい。二人はこの後も残業をするようだが、終業時刻後の課内の雰囲気は日中に比べて比較的穏やかで、他の社員の表情も心なしか明るかった。

「でも、室長のおっしゃることも分かります。この部署の皆さん、綺麗な方ばかりですものね」